

奥会津だより

冬ながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

「古今和歌集」清原深養父
きよはらのふかやぶ

二月二日。村境に二体の藁人形が立った
災いを封じ万病を引き受ける守り人は
悪しきものをすべてをその身に抱え
やがて闇を拓く炎と化す
(二頁に記事あり)

奥山にある里山

写真・文 新国 勇

いま里山が人気だ。田畑や雑木林という人の営みによって育まれてきた里山。そこは多種多様な生き物たちがバランスよく生息できる環境とされている。

なかでも奥会津の里山は、都市近郊の里山とは比較にならないほど懐深い奥山にある。ブナの森が集落の裏山から広がり、人家近くの川べりには希少植物であるユビソヤナギが自生する。絶滅の心配があるクマタカが上空を舞う。このような原生的な自然環境を残してきたのは、里人が自然へのダメージを抑えつつ共存して暮らしてきた証といえる。

「奥山にある里山」は奥会津の特色のひとつだ。



奥会津に棲む神々

にんにようまんによ

(柳津町・胃中)

二月二日の夕刻、胃中地区の村はずれで、男女をかたどった二体の藁人形に火が点けられる。

人形作りは村中総出だ。手足の指を編み、男には刀と弓矢、女には薙刀を持たせ、紙に描いた顔を細木で張り付けて完成する。

これは、仏事だと、世話役の方は長年続けられてきた行事をつつがなく遂行する意志を込めて語った。

日暮れと共に三々五々集まってきた人たちは、体の悪いところを人形に移すために、食事に使った

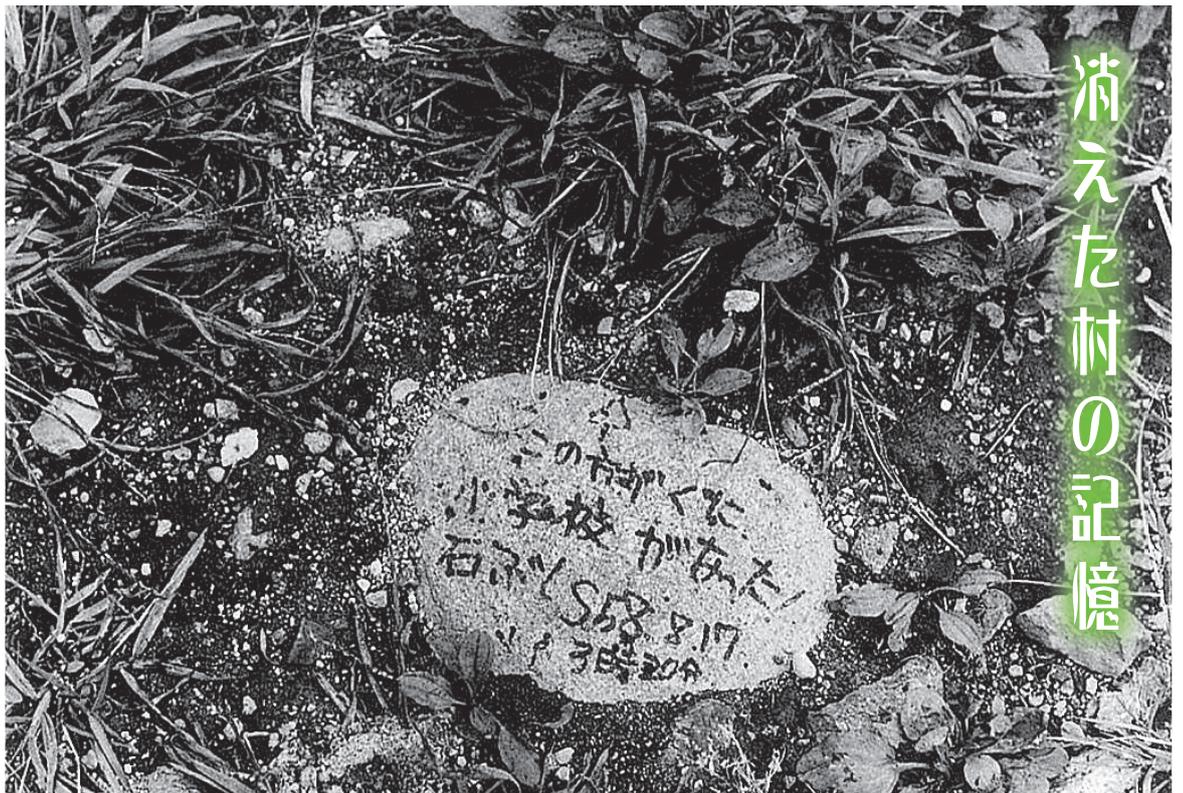
箸を人形に刺し、無病息災と家内安全を祈る。かつては集落の上にと男、下に女の人形を運んで燃やしたという。「にんにようまんによう送れヨ」と歌いながら、たいまつに火を点けて上と下に送って行った。「にんにようまんによう」とは、「人形万病」がなまったのではないかという。

やがて藁人形は、降りしきる雪の中で紅蓮の炎に包まれる。病も災厄もその身と共に焼き尽くされ、一年間の無事が約される。

(写真・金子勝之)



消えた村の記憶



廃校になった校舎は、只見川の本流の対岸にある。母校の水没を知った小学生が、誰が見るでもない足もとの石に書いた追悼の言葉。

厳しい事実と子どもたちの直情を伝えて余すことない、本当の記念碑。

(昭和五十八年 只見町)

写真・文 竹島善一

私の住んでいる松原には昔分校があった。今日は、分校について祖父から聞いた。

Q：何年前から分校はあった？

A：約百年くらいからあったぞ。

Q：生徒は何人くらい？

A：滝谷と松原で一年生から六年生で百人くらいだ。冬は滝谷の生徒は滝谷の分校で勉強したぞ。十一月の半ばから三月いっぱいまでだ。

Q：分校にあった物で思い出深いのは？

A：学校にオルガンが一台だけあって生徒は触っちゃいけないかったんだ。先生ばかり弾いてたな。

Q：分校はなんでなくなったの？

A：だんだん生徒が少なくなつて宮下に通つようになつたんだ。んで、分校をたてかえて今の保育所になつたんだぞ。

Q：分校の名前は？

A：名前は宮下小学校松原分校っていうんだ。

Q：じいちゃんは何分校に通つたの？

A：うん一年から六年まで通つたよ。あと、つけくわえるんなら、入学式、終了式、卒業式、運動会は本校に行つたんだ。遠足はこっただけでやつたかな。

祖父からいろいろ分校の話を聞いて自分の知らないことがたくさんあってびっくりしました。これからは松原の分校について調べてみようかと思いました。



取材ノート

阿部 みずほさん

(平成七年生)

当時中学三年生



Q：じいちゃんとは、日頃からよく話をしていたのですか？

みずほさん：そうですね。私の家の隣が分校だったので、家庭のプランコとかで遊んでいましたし、むかし通つた学校だったという話を祖父から聞いていました。私はじいちゃん子だったので、じいちゃんの上や隣でご飯を食べたりしていました。

Q：みずほさんのお名前の由来は？

みずほさん：母から聞いたのは、子どもを「みつちゃん」と呼びたかった。それで、「みちの」という

候補もあつたらしいのですが、当時男性の歌手がいたということでお父さんの意見も取り入れ「みずほ」になつたらしいです。

Q：三島町の小中学校を卒業して、その後はどちらへ？

みずほさん：郡山市の尚志高校を卒業して、星総合病院付属のポリリス保健看護学院へ進学しました。そこで、看護師と保健師の資格を取得、現在保健師として勤務しています。

Q：お姉さんたちは郡山に住んでいて、みずほさんも郡山での就職を考えたのでは？

みずほさん：卒業して一年間、星総合病院で看護師をしていましたが、保健師の仕事を目指していたので、金山町で勤めることになりました。

Q：なぜ、保健師に？

※みずほさんは三姉妹の末っ子。姉二人は結婚して、郡山市在住。朝七時半に自宅を出て、四輪駆動のホンダフリードで通勤している。

写真・文責：菅 敬浩

後継ぎ始動！

菅家 豊さん 昭和五十七年生

会津若松出身の豊さんは、昭和村に住む奥さんとの結婚を機に、二〇一二年から昭和村で暮らしている。暦ちゃんという娘さんは三歳になった。

村内の農業法人グリーンファームに勤務し、田圃の管理や草刈りなどの組織的な農作業に加え、最近ドローンを使って農薬を散布するなど、新しい技術も取り入れているという。冬期間は除雪が主な仕事になっている。

余暇はマタビ細工に余念がない。山登りが好きだったことも関係してか、三年ほど前、近所に住む当時九〇歳だった五十嵐平喜さ

んのもとで編み方のイロハから教えを受けた。習う人がたくさんいて、マタビを作っている平喜さんはカッコよく見えたという。昨年亡くなられたが、その技術は豊さんにも引き継がれている。「縁あって、ここに暮らしているんだな、と思います。」暦ちゃんをいとおしそうに見つめながら、豊さんは最後にそう語った。



落雁の木型

菓子の木型を彫る職人さんは、現在、全国でも数人という。左右凹凸を逆に彫り出す巧みな技術が、昭和村の大芦地区では当たり前のように家々に残っていたことに驚かされる。赤い鯛は魔除けでもあつたという。宝尽くしや季節の花など、貴重な砂糖を使う落雁の木型は、折り



と感謝の心を表現する美しい暮らしの証である。

令和の奥会津風土記

むらをあらく
 (三) 只見町等
 金山町等



和泉田の豊かな水田



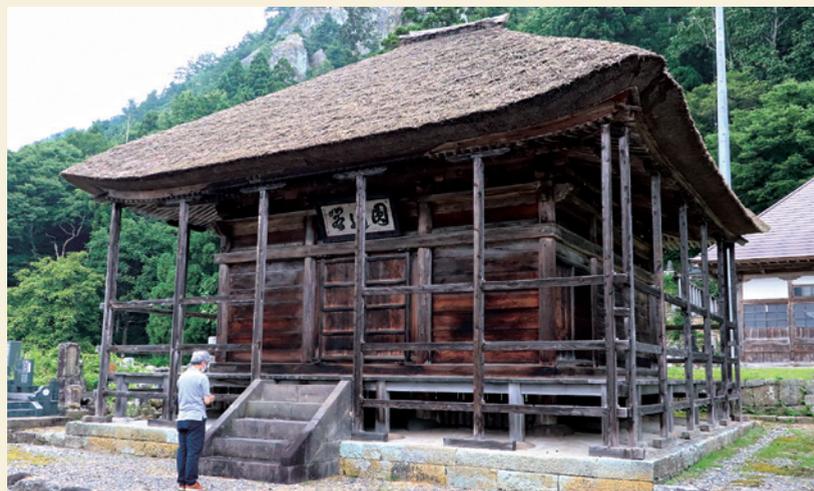
河原崎城跡地入口

和泉田
 二渡神社 河原崎城跡地入口

二〇二〇年八月二十二日の朝、只見町ブナセンター集合。車四台に分乗し、マスク着用で南会津町和泉田の二渡神社・河原崎城跡入口、只見町の梁取、塩ノ岐川の八乙女、布沢、松坂峠、金山町山入川流域（天岐・鮭立）、横田の集落を赤坂憲雄氏らと訪問した。晩夏とはいえ汗が流れる暑さ。

天正十七年（一五八九）六月に黒川（会津若松）を占領した伊達政宗軍は、野尻（昭和村）・布沢（只見町）を拠点に梁取・和泉田・横田等を攻めた。

会津藩編纂の『新編会津風土記』（一八〇九年）によると、当地は和泉田組に属し「平地なお多く」「米穀常に豊なり」と明記した十四か村あり、特に小林・梁取・塩ノ岐・和泉田は当地域の拠点となっていた。寺社仏閣・人物碑を訪ねた。



梁取 成法寺観音堂 寺社のみならず石祠や野仏の前に立つとき、必ず脱帽・合掌する赤坂氏の姿があった。

梁取

成法寺の観音木像は応長元年（一三一一）の胎内銘を持つ。御蔵入三十三観音の一番札所。大きな岩場を後背地に持ち、古くから聖地であった。柳津虚空蔵がこの岩場と柳津とを往復したという伝承を持つ。

梁取 成法寺



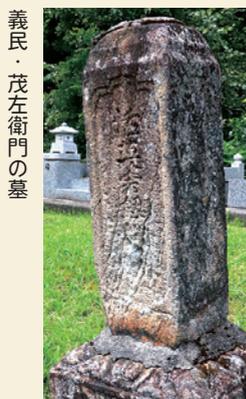
八乙女

御蔵入三十三観音霊場
二番札所の八乙女堂は、
塩ノ岐川の道路沿いにあ
る。
堂の左手には、四基七
体の石仏。



布沢

享保六年（一七二一）に布沢か
ら江戸登りした茂左衛門は翌年六
月に仲間らと打ち首になっている
（南山御蔵入騒動）。義民供養碑が
立つ龍泉寺墓地を訪ねた。



義民・茂左衛門の墓

白峯銀山事件と馬場仁右衛門

集落南方の高台の杉林内の墓地の最
奥に「月山道江居士」と陰刻された当
地の馬場仁右衛門の墓碑がある。高
さは二メートルを超える。寛文七年
（一六六七）の碑は、近隣の郷頭ら八名により建立された。現在
の福島県と新潟県の県境は、本来尾根境であった。会津藩の只見
川上流で銀鉱脈が発見されたが、越後高田藩に占地されて現在の
只見川境にされてしまった。これに異議をとなくて江戸幕府に訴
状を出したのが仁右衛門らであった。
寛永十九年から四年間の訴訟は、
正保三年（一六四六）に国境は赤
川（只見川）半分を境目と裁定され
てしまった。寛文七年（一六六七）
に仁右衛門は逝去した。（飯塚恒夫
「白峯（しらぶ） 銀山事件と馬場仁
右衛門」『南会津のあゆみ』南会津
地方町村会、二〇〇五年）



仁右衛門の墓碑

仁右衛門の墓前には、旧盆に供え
られたらしい新しい線香が燃え残っ
ていた。彼を敬慕する精神は生き続
けている。



松坂峠のミズナラは木喰
虫の被害で多くが葉を赤く
枯らしていた。



龍泉寺墓地の義民碑



松坂峠 大岐古戦場跡

金山町大岐

昭和四十四年の水害の被害後、横田に移転し
た。跡地付近は看板類が整備されている。



横田

山ノ内氏の居館跡を歩い
た。中世の遺構として残っ
ている貴重な土塁である。



山ノ内氏居館跡

鮭立

磨崖仏を拝観した。また太門屋敷の「雪見の梨」
を見た。この木の葉が落ちると根雪になるという。
植物と自然の推移、
人々の交流を感じる
ものである。

鮭立集落の背後に
大きな幽（ゆう）（洞穴）が
あり、不動明王を中
心に大小五十一体の
磨崖仏が鎮座する。
修験者が二代にわ
たって彫ったという。会津では唯一の磨崖仏群
である。この山の裏手には、沼ノ又という集落
があり、四十四災（昭和四十四年災害）で大塩
に移転している。また新遠路の不動窟に沼ノ又
不動が移転安置されている。



鮭立の磨崖仏群

文・菅家博昭
写真・菅敬浩



クイズに答えて奥会津の地場産品を貰おう!

問題 山ノ内氏の居館跡はどこにあるでしょう?

ヒント:「令和の奥会津風土記」を参照してください。

正解者の中から抽選で以下の賞品をプレゼントいたします。

- ・金山町の「マタタビ平ザル」 5名様
- ・寄贈された丑年のお守り(桐製) 10名様

●応募方法: 官製ハガキに奥会津だよりの感想、住所、氏名、電話番号を明記の上、答えをお書きください。

●あて先: 〒969-7511
福島県大沼郡三島町大字宮下字中乙田979
奥会津書房 宛

●応募締切: 2021年2月28日消印有効

※当選者の発表は、商品の発送をもってかえさせていただきます。※クイズの答えは次号119号で発表いたします。

◎117号の答え:「冨中」

たくさんのご応募ありがとうございました!



丑年のお守りをご寄贈いただきました

コロナ禍を乗り切り、安全運転で過ごせるようにと、三島町の小柴芳夫様(94歳)より桐製の干支お守りをいただきました。丑年に因んだ心のこもった手製のお守りです。きっと災難をはねのけてくださるでしょう。10名様に。



奥会津だより 定期読者募集中

ご希望の方は事務局まで発送先(ご住所・お名前)をご連絡ください。

問い合わせ先: 奥会津書房

TEL.0241-52-3580 FAX.0241-52-3581

E-mail: oab@topaz.ocn.ne.jp



お便りコーナー



- 私にとってリニューアル「奥会津だより」は「奥会津百科事典」です。奥会津郷の人々と触れ合ってみたいと思う程に素敵な郷です。 「素晴らしい」に尽きます。(新潟市: H.Tさん)
- 「奥会津風土記」の内容は大変興味深く拝見。太子守宗の俗称、会津藩の宗教統制により消滅…図書館などで調べてみるつもりです。(倉敷市: N.Hさん)
- 「奥会津だより」の感想は、寒さの中にスツと立っている樹木の、誇り高さ匂いに満ちている。(埼玉県小川町: S.Gさん)
- 落雁の木型が家庭にあったとはびっくりしました。いろいろなものが自家製であり、ごちそうづくりやとっておきのときに使われたのですね。(笠間市: E.Mさん)
- 117号の表紙を見て衝撃を受けました、美しい文章が記された芋桶、しかもそれが回文であるという。もうひとつ衝撃を受けたのは、からむしの糸の美しさ。(福島市: F.Tさん)
- 奥会津の自然誌で「雪食地形」という言葉を初めて知りました。只見に行くたびに伊南とは違った山の様子を圧倒されます。(南会津町: F.Mさん)
- リニューアルされていることとバージョンアップした紙面になり驚いた。奥会津には変わらない風景と共に、そこに息づいている伝統文化・生業が伝わって行ってほしいと願っています。(村上市: T.Tさん)

新しい出版物のお知らせ

○『奥会津の聞き書き』2月28日発行



『奥会津こども聞き書き集』を『奥会津の聞き書き』として改訂いたしました。子どもの聞き書きに加えて、奥会津だより紙上でお伝えしてきた「令和の奥会津風土記」に関連する調査の聞き書きを併せて掲載しています。

全166頁 B6判 カラー

○『日常使いの民具たち』2月20日発行



今は使われなくなった古い民具や野良着の新たな活路を探ろうと、古民家を舞台に現代の日常的な暮らしの中で再生を試みた記録です。手仕事に通底する精神性の継承を目指しています。

全24頁 A5判 カラー

○『奥会津の郷土料理と昔語り』2月28日発行



ハレの日に神々と共食する祝いの膳を、「刈り上げ祝い」「冬至の祝い」として再現。関連する昔語りと共に、郷土の食文化の豊かな背景を伝えています。

全20頁 A5判 カラー

※すべて無料(各種交付金や補助金で作成)ですが、ご希望の方はそれぞれ200円切手を同封の上、奥会津書房(〒969-7511 福島県大沼郡三島町宮下字中乙田979 TEL:0241-52-3580)まで郵便でお申し込みください。

イベント情報について

コロナの感染拡大の影響により、各種イベントが今も中止や延期を余儀なくされています。今後も奥会津との健やかな交流が継続できますよう、様々な方面から計画を見直し、新たな形でご案内ができるよう地域一丸となって取り組んでいます。

野山を埋め尽くす深い雪も必ず消えるように、コロナが退散する清やかな季節を信じて、春を待っています。みなさまとお目にかかれるまで、喜びは何十倍にも育っていることでしょう。



発行: 只見川電源流域振興協議会(柳津町・三島町・金山町・昭利村・只見町・南会津町(南郷、伊南、館岩地域)・檜枝岐村)

発行日: 2月20日発行(年3回発行) 事務局: 〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地 奥会津振興センター内

TEL.0241-42-7125 <http://www.okaizu.net> webmaster@okaizu.net

編集・問合せ先: 奥会津書房 福島県大沼郡三島町宮下 TEL.0241-52-3580

★只見川電源流域振興協議会は、福島県只見川流域の7町村の活性化と振興を図るために活動している団体です。

この冊子は電源立地地域対策交付金の事業により作成されています。